東京外国語大学『語学研究所論集』第 19 号 (2014.3) , 203-219

〈特集「他動性」〉

イタリア語

久保 博

アンケートに対する回答を格枠組みの観点から考察した後，（1d）について動詞の項の数と構文が変わるとそれに伴い完結性（telicity）が変化するという現象とからめて後述する [1]．イタリア語には項の数と構文の変化に伴うさまざまな現象が報告されており，同言語に特徴的で重要な現象の一つといえる．

（1）【直接影響・変化】

a. <u>lui</u> ha ammazzato *la mosca.*
‘彼’$_{主}$ ‘殺す’$_{近過+3+単}$ 定冠+‘蠅’$_{対}$
彼はそのハエを殺した．

b. <u>lui</u> ha rotto *la scatola.*
‘彼’$_{主}$ ‘壊す’$_{近過+3+単}$ 定冠+‘箱’$_{対}$
彼はその箱を壊した．

c. <u>lui</u> ha riscaldato *la zuppa.*
‘彼’$_{主}$ ‘温める’$_{近過+3+単}$ 定冠+‘スープ’$_{対}$
彼はそのスープを温めた．

d. （発話不可能）
彼はそのハエを殺したが，死ななかった．

予測していたような主格－対格という格枠組みが出現した．動作主が主格で，対象は対格で示される．イタリア語における主格－対格の区別は，形態論的には衰退してしまって，人称代名詞の体系の一部に残るのみであるが，多くの研究者は，統語論的な諸特徴（特に，動詞の後ろという位置）によって，この区別が想定可能であると考えている．

---

[1] アンケートの和文を伊訳した後，イタリア語を母語とする話者のチェックを受けたものを例文として挙げることとする．同一の文に複数の回答が可能である場合，小文字のローマ数字にて番号を示した．また，アンケートにないが今回の調査に有用であると思われる例文も追加してある．本アンケートでは，必要最小限の文法範疇や機能などを示すため煩雑にならない範囲で以下の符号を用いる．例文において，主格の付与されている要素は下線で強調され，対格の付与されている要素はイタリック体である．‘’=意味，（ ）=実際は省略される要素，$_{1}$=一人称，$_{2}$=二人称，$_{3}$=三人称，$_{単}$=単数，$_{複}$=複数，$_{近過}$=近過去，$_{現}$=現在形，$_{現進}$=現在進行形，$_{半過}$=半過去，$_{過分}$=過去分詞，$_{コ動}$=コピュラ動詞，$_{支動}$=支持動詞，$_{不定}$=不定詞，$_{主}$=主格，$_{対}$=対格，$_{与}$=与格，$_{定冠}$=定冠詞，$_{部冠}$=部分冠詞，$_{不定冠}$=不定冠詞，$_{他}$=他動詞，$_{自}$=自動詞，$_{非対}$=非対格動詞，$_{従節}$=従属節．

(2) 【直接影響・無変化】

a.i.	lui	ha calciato	*il pallone.*	
	‘彼’$_{主}$	‘蹴る’$_{近過+3+単}$	定冠+‘ボール’$_{対}$	
ii.	lui	ha dato	*calcio*	al pallone.
	‘彼’$_{主}$	‘与える’$_{近過+3+単}$	‘蹴り’$_{対}$	に+定冠+ボール

彼はそのボールを蹴った.

b.	lei	gli	ha calciato	*la gamba.*
	‘彼女’$_{主}$	‘彼’$_{与}$	‘蹴る’$_{近過+3+単}$	定冠+‘脚’$_{対}$

彼女は彼の足を蹴った.

c.	lui	si sono scontrato	contro	quella persona.
	‘彼’$_{主}$	‘ぶつかる’$_{近過+3+単}$	‘に対して’	‘その’+‘人’

彼はその人にぶつかった（故意に）.

d.i.	lui	si sono scontrato	contro	quella persona.
	‘彼’$_{主}$	‘ぶつかる’$_{近過+3+単}$	‘に対して’	‘その’+‘人’
ii.	lui	è finito	contro	quella persona.
	‘彼’$_{主}$	‘終わる’$_{近過+3+単}$	‘に対して’	‘その’+‘人’

彼はその人にぶつかった（うっかり）.

（2a）では，他動詞 calciare を用いて，主格－対格という格枠組みが現れる．対象は対格によって示される．より一般的には動詞 dare「与える」を用いて『けりを与える』のような言い方をするが，この場合，主格－対格－与格と，けりを与える対象を示すのには与格が使われる．（2b）は主格－対格－与格の格枠組みを使い対象を対格として，そしてその対象が，つまりこの場合足が誰の体の一部であるかが与格として示される．

（2c）および（2d）の構文では主に，動作主を示すのに主格が用いられ，対象を前置詞 contro で導入する例を用意した．動詞 scontrarsi には動作主が故意に行ったかということは含意されておらず，前置詞句や副詞句によって修飾されなければならない．ただ動詞 finire を非対格動詞として使った場合，「周囲の状況により不可避的にその人物にぶつかった」ということを含意させることもできる．

(3) 【知覚 2A vs. 2B】

a.	(io)	vedo	*delle persone*	lì.
	(‘私’)$_{主}$	‘見る’$_{現在+1+単}$	部冠+‘人’$_{対}$	‘あそこに’

あそこに人が数人見える.

b.	lui	ha visto	*la casa.*
	‘彼’$_{主}$	‘見る’$_{近過+3+単}$	定冠+‘家’$_{対}$

彼はその家を見た.

c.i. (io) ho sentito urlare *qualcuno.*

(‘私’)$_{主}$ ‘聞く’$_{近過+1+単}$ ‘叫ぶ’$_{不定}$ ‘誰か’$_{対}$

ii. (io) ho sentito urlare.

(‘私’)$_{主}$ ‘聞く’$_{近過+1+単}$ ‘叫ぶ’$_{不定}$

誰かが叫んだのが聞こえた.

d. lui ha sentito *il rumore.*

‘彼’$_{主}$ ‘聞く’$_{近過+1+単}$ 定冠+‘雑音’$_{対}$

彼はその音を聞いた.

「見る」や「聞く」といった知覚動詞は主格－対格の格枠組みを使い，（3a），（3b），（3d）のように主格で経験者を表し，対格で知覚される対象を表す．能力として知覚する能力があるかないかという場合は，接辞 ci を伴い，その能力を有する人物を主格で示す.

e, (io) ci vedo.

(‘私’)$_{主}$ ‘見える’$_{現在+1+単}$

見える

f. (io) ci sento.

(‘私’)$_{主}$ ‘聞こえる’$_{現在+1+単}$

聞こえる

また知覚動詞と共に動詞の不定詞を用いる（3c）では，経験者を主格で，「叫ぶ」行為を行った人間を対格で表す．名詞に格を表す形態論的な要素は見られないが，代名詞化すると対格であるということがハッキリと見て取れる.

g. (io) ho sentito urlare *un ragazzo* in piazza.

(‘私’)$_{主}$ ‘聞く’$_{近過+1+単}$ ‘叫ぶ’$_{不定}$ 不定冠+‘青年’$_{対}$ ‘において’+‘広場’

広場で青年が叫ぶのを聞いた.

h. (io) *l’*ho sentito urlare in piazza.

(‘私’)$_{主}$ ‘彼’$_{対}$+‘聞く’$_{近過+1+単}$ ‘叫ぶ’$_{不定}$ ‘において’+‘広場’

広場で彼が叫ぶのを聞いた.

（3c）のようにイタリア語では叫んだ人物がこれといって特定されていない場合は，qualcuno「誰か」を用いて表すこともできるが，動作主を語彙として表現しないことで，特定できない人物が叫んだという意味になる.

(4) 【（知覚 2A）発見・獲得・生産など】

a. lui ha ritrovato *la chiave.*

‘彼’$_{主}$ ‘見つける’$_{近過+3+単}$ 定冠+‘鍵’$_{対}$

彼は（なくした）鍵を見つけた.

b. lui ha fatto *una sedia.*

‘彼’$_{主}$ ‘作る’$_{近過+3+単}$ 不定冠+‘椅子’$_{対}$

彼は椅子を作った.

動作主を主格で，対象を対格で示す.

(5) 【追及】

a. lui sta aspettando *l’autobus.*

‘彼’$_{主}$ ‘待つ’$_{現進+3+単}$ 定冠+‘バス’$_{対}$

彼はバスを待っている.

b. io aspettavo che lui arrivasse.

‘私’$_{主}$ ‘待つ’$_{半過+1+単}$ ‘彼がくるのを’$_{従節}$

私は彼が来るのを待っていた.

c. lui sta cercando *il portafogli.*

‘彼’$_{主}$ ‘探す’$_{現進+3+単}$ 定冠+‘財布’$_{対}$

彼は財布を探している.

動作主を主格で，対象を対格で示す.

(6) 【知識 1 】

a. lui sa bene *tante cose.*

‘彼’$_{主}$ ‘知る’$_{現+3+単}$+‘良く’ ‘多くの’‘こと’$_{対}$

彼はいろいろなことをよく知っている.

b. io conosco *quella persona.*

‘私’$_{主}$ ‘知る’$_{現+1+単}$ ‘あの’+‘人’$_{対}$

私はあの人を知っている.

c. lui capisce *l’italiano.*

‘彼’$_{主}$ ‘分かる’$_{現+3+単}$ 定冠+‘イタリア語’$_{対}$

彼にはイタリア語がわかる.

動詞 sapere, conoscere 双方ともに「知っている」と訳すことのできるが，それぞれ若干ニュアンスが異なる．ごくごく簡潔に述べるならば動詞 conoscere は人物やニュース，場所などに

ついて知っているときに使い，動詞 sapere は出来事や事実について知っているときに使う．conoscere，sapere ともに経験者を主格で示し，何について知っているのかを対格で示す．

言語能力の有無を示す場合，（6c）で示した動詞 capire「理解する」以外にも，（6d）の様に sapere，conoscere なども使うことができ若干意味が異なるが，それについてここでは詳しく触れないこととする．

d. Qualcuno sa / conosce *l'italiano*?
'誰か'$_{主}$ '知る'$_{現+1+単}$ 'イタリア語'$_{対}$
誰かイタリア語を知ってる？

いずれの場合も能力を有する人物を主格で示し，言語をあらわす名詞句を対格で示す．動詞 sapere を用いた構文で，言語を示す名詞句を前置詞 di によって導入することもできる．

e. （io） so di latino.
'私'$_{主}$ '知る'$_{現+1+単}$ 'について'+'ラテン語'$_{対}$
ラテン語が分かる

ただ，この場合「ラテン語が若干分かる」ということを含意している．

（7）【知識２】

a.i. lei ricorda *ciò che ho detto ieri*?
'あなた'$_{主}$ '覚えている'$_{現+3+単}$ '昨日私が言ったことを'$_{対+従節}$
ii. lei si ricorda *ciò che ho detto ieri*?
'あなた'$_{主}$ '覚えている'$_{現+3+単}$ '昨日私が言ったことを'$_{対+従節}$
iii. lei si ricorda di ciò che ho detto ieri?
'あなた'$_{主}$ '覚えている'$_{現+3+単}$ 'について'+'昨日私が言ったことを'$_{従節}$
あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

b.i. io ho dimenticato *il suo numero*.
'私'$_{主}$ '忘れる'$_{近過+1+単}$ 定冠+'彼の'+'電話番号'$_{対}$
ii. io mi sono dimenticato *il suo numero*.
'私'$_{主}$ '忘れる'$_{近過+1+単}$ 定冠+'彼の'+'電話番号'$_{対}$
iii. io mi sono dimenticato del suo numero.
'私'$_{主}$ '忘れる'$_{近過+1+単}$ 'について'+定冠+'彼の'+'電話番号'
私は彼の電話番号を忘れてしまった．

動詞 ricordare / ricordarsi および動詞 dimenticare / dimenticarsi を用い，経験者は主格によって示される．ただ何を覚えているのか，若しくは忘れてしまったのかを示す時には二通りの表現がある．他動詞でも代名動詞でも記憶に関する内容を直接目的語として示すことができるが，代名動詞の場合は前置詞 di によって導入することもできる．

以上の三つの構文の違いがどのように意味に反映されているのかは，更なる調査が必要である．

(8) 【感情１】

a. la madre amava *i bambini.*

定冠+'母'$_{主}$ '愛する'$_{半過+3+単}$ 定冠+'子供'$_{対}$

母は子供たちを深く愛していた．

b. mi piace la banana.

'私'$_{与}$ '好き'$_{現+3+単}$ 定冠+'バナナ'$_{主}$

私はバナナが好きだ．

c. io odio *quella persona.*

'私'$_{主}$ '憎む'$_{現+1+単}$ 'あの'+'人'$_{対}$

私はあの人が嫌いだ．

Belletti/Rizzi（1988）が指摘しているように，イタリア語では感覚や感情を表すためにさまざまな構文を用いることができる．アンケートに対する回答としてこのグループでは，二通りの格枠組みが使えるという結果を得た．（8a），（8c）のように主格で経験者を，対格でその対象を示すか，（8b）のように与格で経験者を，主格でその対象を示す．

(9) 【感情２】

a. io voglio *le scarpe.*

'私'$_{主}$ '欲する'$_{現+1+単}$ 定冠+'靴'$_{対}$

私は靴が欲しい．

b. adesso, mi servono i soldi.

'今' '私'$_{与}$ '必要である'$_{現+3+複}$ 定冠+'お金'$_{主}$

今，私にはお金が要る．

このグループでも，二通りの格枠組みを使えるという結果を得た．（9b）のように「必要」を表す表現，たとえば動詞 volerci や形容詞 necessario などを用いた構文でも，経験者を与格で表す．

（10）【感情３】

a. mia madre è arrabbiata del fatto che mio fratello ha detto bugie.

‘私の母’$_{主}$ コ動+‘怒る’$_{過分}$ ‘について’+定冠+‘事実’+‘弟が嘘をついた’$_{従節}$

（私の）母は（私の）弟がうそをついたのに怒っている．

b. lui ha *paura* di cane.

‘彼’$_{主}$ 支動$_{現+3+単}$+‘恐怖’$_{対}$ ‘について’+‘犬’

彼は犬が恐い．

このグループにおいては経験者が主格によって示されている．（10a）では怒っている状態を示すのには過去分詞 arrabbiata を用い，怒っている対象を前置詞 di によって導入する．（10b）では，怖いという感情を示すために支持動詞 avere を用い，名詞 paura「怖い」を直接目的語の位置に置く．これにより主格で示されている人物の心理的状態を表し，恐怖を抱いている対象を前置詞 di によって導入する．

支持動詞を使った構文は，その動詞自体はほぼ何も意味をもたず，直接目的語の位置にある名詞と組み合わさることで，主格で示されている要素の状態や特性，状態の変化を示す述語を形成し，あたかも一つの動詞であると見ることができる

（11）【関係１】

a. lui assomiglia al padre

‘彼’$_{主}$ ‘似ている’$_{現+3+単}$ ‘に’+定冠+‘父’$_{与}$

彼は父親に似ている．

b.i. nell’acqua del mare c’è il sale.

‘の中に’+定冠+‘海の水’ ‘ある’$_{現+3+単}$ 定冠+‘塩’$_{主}$

ii. l’acqua del mare contiene *il sale*.

定冠+‘海の水’$_{主}$ ‘含む’$_{現+3+単}$ 定冠+‘塩’$_{対}$

海水は塩分を含んでいる．

（11a）のように物体や人物の近似性を表す動詞 assomigliare を使う場合，一方を主格で示し，もう一方を与格によって示す．（11b-i）では，存在を表す動詞 esserci を用い，含まれている物質つまり塩を主格で示す．その塩を含んでいる物質は場所を表す前置詞句として示している．ただ同様の内容を（11b-ii）の様に，塩を含む物質を主格として表し，含まれている塩を対格として示すこともできる．

（12）【関係２】

a.i. mio fratello è un medico.

‘私の’+‘弟’$_{主}$ コ動$_{現+3+単}$ 不定冠+‘医者’$_{主}$

ii. mio fratello fa il medico.
‘私の’+‘弟’$_{主}$ ‘する’$_{現+3+単}$ 定冠+‘医者’$_{対}$
私の弟は医者だ.

b. mio fratello è diventato medico
‘私の’+‘弟’$_{主}$ ‘なる’$_{近過+3+単}$ ‘医者’$_{主}$
私の弟は医者になった.

「私の弟は医者だ」のように職業を示す表現は二通りに表現できる．（12a-i）の様にコピュラ動詞 essere を用いた構文で，不定冠詞をつけて名詞を続けるか，（12a-ii）の様に，他動詞 fare を用い，定冠詞をつけて名詞を続けるかして表現する．「なる」という表現に関しては，（12b）の様にイタリア語でも予測通りコピュラ構文が用いられる．

（13）【能力１】

a.i. lui sa guidare,
‘彼’$_{主}$ ‘できる’$_{現+3+単}$ ‘運転する’$_{不定}$

ii. lui è capace di guidare.
‘彼’$_{主}$ コ動$_{現+3+単}$+‘能力がある’ ‘について’+‘運転する’$_{不定}$
彼は車の運転ができる.

b.i. lui sa nuotare.
‘彼’$_{主}$ ‘できる’$_{現+3+単}$ ‘泳ぐ’$_{不定}$

ii. lui è capace di nuotare.
‘彼’$_{主}$ コ動$_{現+3+単}$+‘能力がある’ ‘について’+‘泳ぐ’$_{不定}$
彼は泳げる.

ある行為を行う能力を示す場合，（13a-i），（13b-i）のように助動詞 sapere を用いその後に不定詞を続ける．また形容詞 capace「能力がある」を用いて，（13a-ii），（13b-ii）のように前置詞 di に不定詞を続け能力の内容を示すこともできる．能力を有する主体は主格で表す.

（14）【能力２】

a. lui è bravo nel parlare.
‘彼’$_{主}$ コ動$_{現+3+単}$+‘上手い’ ‘について’+定冠+‘話す’$_{不定}$
彼は話をするのが上手だ.

b. lui è negato nel correre.
‘彼’$_{主}$ コ動$_{現+3+単}$+‘下手だ’ ‘について’+定冠+‘走る’$_{不定}$
彼は走るのが苦手だ.

ある能力に習熟しているかを示すのに，主に形容詞を使う．（14-a）では形容詞 bravo「得意である」を用い，前置詞 in に定冠詞を付けて名詞化した動詞の不定詞を続け，得意である能力の内容を示す．逆の概念である「苦手である」を表す時も同様である．過去分詞 negato を形容詞として用い，前置詞 in に定冠詞を付けて名詞化した動詞の不定詞を続け，苦手である能力の内容を示す．能力がある主体は主格で示される．

（15）【移動】

a. lui è arrivato a scuola.
‘彼’$_{主}$ ‘着く’$_{近過+3+単}$ ‘に’+ ‘学校’
彼は学校に着いた．

b. lui ha attraversato *la strada*
‘彼’$_{主}$ ‘横切る’$_{近過+3+単}$ 定冠+ ‘道’$_{対}$
彼は道を渡った／横切った．

c.i. lui ha fatto *quella strada*.
‘彼’$_{主}$ ‘通る’$_{近過+3+単}$ ‘あの’+ ‘道’$_{対}$

ii. lui è passato per quella strada.
‘彼’$_{主}$ ‘通る’$_{近過+3+単}$ ‘を経由して’+‘あの’+ ‘道’
彼はあの道を通った．

d lui ha raggiunto *la destinazione*.
‘彼’$_{主}$ ‘到達する’$_{近過+3+単}$ 定冠+‘目的地’$_{対}$
彼は目的地に到達した

イタリア語において移動を表す動詞の構文では，（15a）のように動作主を主格で，目的地は前置詞 a を用いて示す．（15b），（15c）では，目的地ではなく移動の行為が行われる場所が示されており，日本語同様，動作主を主格で，移動の行為が行われる場所を対格で示す．ただし，（15d）の raggiungere のような動詞は，場所を直接目的語にとって「到達する」の意味になるが，これはラテン語の他動詞 IUNGERE「結合する」から派生していることや，GDIU などで採用されている第一義が「移動中の先行する人物や乗り物に追いつく」であり，追いつく対象が対格として示されるという点を考慮すると，本来の意味が「移動」ではなく，二つの要素の間の距離がゼロになるといういわば「接触」を表し，むしろ toccare「触れる」や prendere「取る」といった二項の動詞と同じ構文をとるためと推測される．

（16）【感覚１】

a. lui ha *fame*.
‘彼’$_{主}$ 支動$_{現+3+単}$+‘空腹’$_{対}$
彼はお腹を空かしている．

b. lui ha *sete*.

‘彼’$_{主}$ 支動$_{現+3+単}$+‘のどの渇き’$_{対}$

彼は喉が渇いている.

支持動詞 avere を用い，経験者を主格で示し，感覚の内容が直接目的語の名詞句で示される．例えば，痛覚を示すのにも，同様の構文を用いることもできるが，経験者を与格として，痛みを感じる部位を主格で示す構文もある．

c. （io） ho *mal di testa*.

（‘私’）$_{主}$ 支動$_{現+3+単}$+‘頭の痛み’$_{対}$

頭が痛い.

d. mi fa male la testa.

‘私’$_{与}$ 支動$_{現+3+単}$+‘痛む’ 定冠+‘頭’$_{主}$

頭が痛い.

（17）【感覚２】

a. io ho *freddo*

‘私’$_{主}$ 支動$_{現+3+単}$+‘寒さ’$_{対}$

私は寒い.

b. oggi fa freddo

‘今日’ 支動$_{現+3+単}$+‘寒さ’

今日は寒い.

気象に関する動詞 piovere「雨が降る」，動詞 nevicare「雪が降る」はゼロ項である．（17b）では動詞 fare を支持動詞として用いているが，主語が示されることはない．（17a）では（16）の例同様，支持動詞 avere が用いられ経験者は主格で示される．

（18）【（社会的）相互行為１】

a. io *l*’ho aiutato.

‘私’$_{主}$ ‘彼を’$_{対}$+‘助ける’$_{近過+1+単}$

私は彼を手伝った／助けた.

b. io *l*’ho aiutato a portarlo.

‘私’$_{主}$ ‘彼を’$_{対}$+‘助ける’$_{近過+1+単}$ ‘に’+‘それを運ぶ’$_{不定}$

私は彼がそれを運ぶのを手伝った.

イタリア語では，助ける主体を対格として表す．日本語では例文の様にどのような行為であるのかが示されている場合，助けられる人物は主格の「が」によって示し，助ける人物をテーマの「は」で示す．一方イタリア語では，助ける内容が明示されていても助けられる人物を示す格は対格のままであり，助ける内容は前置詞 a によって導入される．

（19）【（社会的）相互行為２（言語行動）】

a.	io	ho chiesto	*la ragione*	a lui.
	‘私’$_{主}$	‘尋ねる’$_{近過+1+単}$	定冠+‘理由’$_{対}$	‘に’+‘彼’$_{与}$
	私はその理由を彼に訊いた．			
b.	io	ho parlato	di esso	a lui.
	‘私’$_{主}$	‘話す’$_{近過+1+単}$	‘について’+‘それ’	‘に’+‘彼’$_{与}$
	私はそのことを彼に話した．			

（19a）では主格で動作主を表し，質問の内容を対格で，質問を投げかける相手を与格で示す．動詞 parlare「話す」は，動作主を主格で示すが，話す内容は前置詞 di で導入された名詞句，もしくは前置詞句を代名詞化し接辞 ne を用いて表す．アンケートに対する回答では，話す相手を前置詞 a で導入された与格で示したが，「議論する」といった意味で使う時は前置詞 con で話す相手を示す名詞句を導入する．

（20）【再帰・相互】

i.	io	*l’*ho visto	
	‘私’$_{主}$	‘彼’$_{対}$+‘会う’$_{近過+1+単}$	
ii.	io	mi sono visto	con lui
	‘私’$_{主}$	‘会う’$_{近過+1+単}$	‘と共に’+‘彼’
iii.	io e lui	ci siamo visti.	
	‘私’$_{主}$+‘と’+‘彼’$_{主}$	‘‘会う’$_{近過+1+複}$	
	私は彼に会った．		

複数の人間が「会う」という出来事を同一の動詞を使って何通りかの方法で表すことができるが，それぞれ微妙に含意が異なる．「会う」という動作を示すために，主に動詞 vedere が使われる．（20-i）は，動作主を主格で表し，その人物が会った人物を対格で示す．偶然道端などで会う場合にも，会合などの約束のために会う場合にも使えるが，（20-ii）は主に約束のために会う場合に使用する．代名動詞として接辞 si の一人称単数形を伴う．会う行為を行う人物は主格で，その人物があった人物は前置詞 con「ーと」をもちいて示される．また（20-iii）では動詞は再帰動詞であり，（20-i），（20-ii）と起こった出来事は同じであ

っても動作主である代名詞 io「私」と代名詞 lui「彼」は双方ともに主格で示され，例文ではテーマ若しくは焦点として提示されている．

もともと視覚の知覚動詞としての vedere「見る」は，「経験者の意図のいかんにかかわらず対象が視界に入る」ということを含意している．経験者の意図が強く反映され一点を見つめるという行動を示す同じく視覚の知覚動詞 guardare とはその点で区別される．見ようと思って見たのか，それとも期せずして見たのかという経験者の意図の有無は，「会う」という意味で他動詞として使った場合にも反映されていると考えられる．

実際には，以上の例文で用いた動詞 vedere / vedersi だけでなく，動詞 incontrare / incontrarsi でも同様の意味になり，この動詞の場合も，ここには示さないが以上の例と同じ三通りの可能性がある．

またその他のさまざまな動詞を使うこともできる．予定を立てて会う場合，例えば遠くに住む知人に面会しにゆく場合などは，動詞 trovare や動詞 visitare を使うことができる．

iv.	oggi	<u>lui</u>	va	a trovare	*la nonna*
	‘今日’	‘彼’$_{主}$	‘行く’$_{現+3+単}$	‘に’+‘会う’$_{不定}$	定冠+‘祖母’$_{対}$
	今日彼はおばあさんに会いにゆく．				
v.	oggi	<u>io</u>	ho visitato	*lo zio.*	
	‘今日’	‘私’$_{主}$	‘訪ねる’$_{近過+1+単}$	定冠+‘叔父’$_{対}$	
	今日私は叔父を訪ねた．				

ここで，動詞 visitare に対応する名詞 visita「訪問」の意味役割付与について見てみたい．

基本的に，発生するイベントが同じであるため，名詞が付与する意味役割は，対応する動詞によって付与される意味役割と変わらないと考えられており，ある他動詞に対応する名詞の場合動作主，対象ともに di によって導入される．

動詞 visitare は，対象が人であっても場所であっても対格としてとることができるため，名詞では対象，場所ともに前置詞 di によって導入することが予想される．しかし，前置詞 di で導くことができるのは動作主であり，会う対象が人である場合非文となる．会う対象となる人物を指し示すには人間を場所の補語として導く前置詞 da を用いなければならない．支持動詞と共につかわれる場合，会う対象となる人物は与格を示す前置詞 a によって導入される．

vi.	<u>io</u>	ho fatto visita	allo zio.
	‘私’$_{主}$	支動$_{近過+1+単}$+‘訪問’	‘に’+定冠+‘叔父’
	私は叔父を訪問した．		

vii　mi　è piaciuta　<u>la visita</u>　dello zio.
‘私’$_{与}$　‘好む’$_{近過+3+単}$　定冠詞+‘訪問’$_{主}$　‘の’+定冠+‘叔父’
叔父が訪ねてきてくれたのでうれしかった.
（ただし「私が叔父のもとへの訪問した事が楽しかった」という解釈はできない．）

viii.　mi　è piaciuta　<u>la visita</u>　dallo zio
‘私’$_{与}$　‘好む’$_{近過+3+単}$　定冠詞+‘訪問’$_{主}$　‘のもと’+定冠+‘叔父’
叔父のもとへの訪問は楽しかった

ここで問題となるのが，以上の前置詞の変化は，補語となる要素への意味役割の変化に対応していると考えられる点であり，動詞 visitare を使う構文では意味役割の変化に伴う格付与の変化が一切観察できない．付与される意味役割の格の変化，意味役割の付与，支持動詞を伴う構文だけでなく，定冠詞の有無による定性の変化といった問題なども関与してくるのだが，残念ながら本稿では詳細に論じる余裕はない．
偶然性，もしくは意図に反して会ってしまったことを表すためには，副詞句を用い動詞を修飾することもできるが，動詞に多様な語彙の選択肢がある．この場合他動詞ではなく専ら非対格構文をとる動詞が用いられる．

…ix.　io　mi sono imbattuto　in un malvivente.
‘私’$_{主}$　‘出くわす’$_{近過+1+単}$　‘に’+不定冠+‘ならず者’
私はならず者に出くわした.

…x.　io　sono finito　davanti ad un malvivente.
‘私’$_{主}$　‘終わる’$_{近過+1+単}$　‘前に’+不定冠+‘ならず者’
私はならず者に出くわす羽目になった.

…xi.　ieri mattina　<u>un malvivente</u>　è capitato　davanti a me.
‘昨日の朝’　不定冠+‘犯罪者’$_{主}$　‘現れる’$_{近過+3+単}$　‘前に’+‘私’
昨日の朝私の前にならず者が現れた.

…xii.　appena uscito dal bar,　<u>io</u>　mi sono trovato　davanti ad un amico.
‘バールから出るとすぐに’　‘私’$_{主}$　‘出くわす’$_{近過+1+単}$　‘前に’+不定冠+‘友人の’
バールから出るとすぐに，そこに友人にばったり会った.

…xiii.　mentre tornavo a casa,　<u>io</u>　mi sono incrociato　con mio zio.
‘帰宅の途中’　‘私’$_{主}$　‘すれ違う’’$_{近過+1+単}$　‘　‘と’+‘私の叔父’
帰宅の途中，私は叔父とすれ違った.

来客と「会う」という場合では，二項動詞 ricevere を用いることができる.

...xiv.	la prof.ssa Vanelli	riceve	*tanti studenti*	ogni settimana.
	定冠+‘ヴァネッリ先生’$_{主}$	面会する’$_{現+3+単}$	‘多くの生徒’$_{対}$	‘毎週’

ヴァネッリ先生は毎週多くの生徒と面会する.

動詞 bruciare の完結性の変化についての考察

イタリア語には二項動詞の他動詞と項要素の形態論－統語論上の振る舞いによって区別される二種類の一項動詞が存在する．Salvi-Vanelli（2004: 45-53）は一方を自動詞と呼び，もう一方を非対格動詞と呼んでいる.

また Salvi-Vanelli（同上: 55-61）によると，構文は三種類あり，対格構文，非対格構文，コピュラ構文と呼ばれている．対格構文をとるのは，他動詞および自動詞，非対格構文をとるのは非対格動詞である．コピュラ構文をとるのは，essere をはじめとするコピュラ動詞なのだが今回の議論では扱わない.

一項動詞の動詞の構文を見るためにいくつかの指標が存在する．ここでは近過去にした場合の助動詞を用いることとする．対格構文の場合 avere が現れ，非対格構文の場合 essere が現れる.

二項動詞の項の数を減少する場合には，essere，venire，andare を用いて受動態に転換するのがその典型例といえるが，ここでは扱わない.

動詞に関する上記の三つの分類も絶対的なものではなく，例えば一つの動詞が三つのグループにまたがる場合もある．項の数が変更される場合，動詞自体に形式上の変化を一切伴わない場合と，接辞 si が付加される場合がある．この接辞 si には統語および意味論上いまだ未解決の非常に複雑な問題をはらんでいる [2]．従ってここではより細かい区分を基本的に用いないこととし，必要があればそれに応じてその都度より細かい区分を導入することとする.

今回，動詞 bruciare の動作主が示されておらず，燃やす対象が名詞 legna「薪」である場合のデータを，項が二つある例と比較しながら示してゆく．以下に示す例では完結性に関する様々な変化が観察できる [3].

まず動作主と対象双方が明示されている，典型的な対格構文を見てみよう.

(27)	io	ho bruciato	*la legna*.
	‘私’$_{主}$	‘燃やす’$_{他+近過+1+単}$	定冠+ ‘薪’$_{対}$

私は薪を燃やした.

[2] Burzio（1986），Cinque（1988），山本（1995），山本（2010），山本（2012）参照

[3] より詳しい議論は Cennamo-Jezek（2011）を参照のこと.

この文では，薪は火をつけられ，その結果完全に灰になったということを表す.

Salvi-Vanelli（同上: 51-53）は非対格動詞の特徴の一つとして，完結性を挙げているが，ここで注意しなければいけないのは，同じく一項の動詞である自動詞と比べた場合完結性が際立つということである.

（28） la legna　ha bruciato　per giorni.
定冠+‘薪’主　‘燃える’自+近過+3+単　‘数日間’
薪は数日間燃えた.

（29） la legna　è bruciata　per giorni.
定冠+‘薪’主　‘燃える’非対+近過+3+単　‘数日間’
薪は数分で燃え尽きた.

（30） la legna　si è bruciata.
定冠+‘薪’主　接辞+‘燃える’非対+近過+3+単
薪は燃え尽きた.

上記の三つの文を比べた場合，（28）は数日間燃えたというプロセスを表しており，薪が完全に燃えきったのかどうかということは重要ではない（29），（30）は双方ともに燃え尽きたという内容を表している．ただ si が付加されている場合は結果が強調されているのであり，（31）のように時間の経過の表現とは相いれない.

（31） *la legna　si è bruciata　per giorni
定冠+‘薪’主　接辞+‘燃える’非対+近過+3+単　数日間

（32） la legna　ha bruciato　a lungo　senza consumarsi.
定冠+‘薪’主　‘燃える’自+近過+3+単　‘長いこと’　‘なしに’+‘使いきる’
薪は長く燃えたが，まだ燃えきってはいない.

（33） la legna　si è bruciata　（*senza consumarsi）
定冠+‘薪’主　接辞+‘燃える’非対+近過+3+単　‘なしに’+‘使いきる’
薪は燃え尽きた（*まだ燃えきっていない）.

（32）は，薪が燃えるというプロセスを表しているのであって，薪が最終的に焼けたかどうかという事実とは関係ない．（33）では薪が焼けたという事実が強調され，時間の長さを表す表現を文に追加することも，その燃え尽きたという命題に反する文をその後に続けることもできない.

接辞 si をともなった非対格動詞を否定する場合，否定される内容は結果であってプロセスではない.

（34） questa legna　　non si brucia
定冠+‘薪’$_{主}$　　否定+接辞+‘燃える’$_{非対+現+3+単}$
この薪は燃え尽きない（薪は燃え続けていて，燃え尽きない）.

文から時間との関連を取り除くと，次のような結果が得られる.

（35） la legna　　si brucia　　facilmente.
定冠+‘薪’$_{主}$　　接辞+‘燃える’$_{非対+現+3+単}$　　‘簡単に’
薪とは簡単に燃えるものだ.

（35）は，時間への言及は失われ，薪の「簡単に燃える」という属性を表していると解釈され，「薪を燃やす」という出来事に触れているのではない.
また自動詞としての用法を否定すると以下のようになる.

（36） la legna　　non ha ancora bruciato.
定冠+‘薪’$_{主}$　　否定+まだ+‘燃える’$_{自+近過+3+単}$
薪に火がまだついていない.

プロセスが進行中でないこと，つまりこの場合では，例えば，薪に火をつけたことはつけたが一瞬火がついただけでその後燃え続けなかったような場合を示す．最後に（1d）のような文がイタリア語において発話不可能であるという問題について，補足データと比較しながら考察しよう.
イタリア語で（1d）を直訳した次の文は非文法的である.

（37） *（io）　ho ammazzato　　*la mosca*　　ma non è morta.
（私）$_{主}$　‘殺す’$_{他+近過+1+単}$　　定冠+‘蠅’$_{対}$　　‘まだ死んでいない’

動詞 bruciare を用いても次のように非文法的である.

（38） *io　　ho bruciato　　*la legna*　　ed è ancora accesa.
‘私’$_{主}$　‘燃やす’$_{他+近過+1+単}$　　定冠+‘薪’$_{対}$　　‘まだ火がついている’

以上二つの文が非文法的と解釈されるのは，この二項の動詞の構文では，動作主が行為を対象に行い，その行動が終了したということを示しているのであり，後にその文が提示する命題に反する命題を示す文をつけることはできない.

つまり，直前に見た「殺す」を用いた日本語の構文には，この完結性が欠けている．しかしイタリア語においては動詞 bruciare を Salvi-Vanelli（同上）の分類による自動詞として用いた場合，完結性の欠如が観察できる．この現象の興味深い点は，同一の動詞であっても項の数や構文によって完結性に変化が生まれる点である.

参考文献

欧文

Belletti, Adreana-Rizzi, Luigi. 1988. “Verbs and Theta-Theory”, *Natural Language and Linguistic Theory*, 6, pp.291-352.

Buzio, L. 1986. *Italian Syntax. A Goverment-Binding Approach*. Dordrecht, Foris.

Cinque, Guglielmo. 1988. “On si constructions and the theory of arb”, Linguistic Inquiry, 19, pp.521-582.

Cennamo, Michele-Jezek, Elisabetta. 2011. “The Anticausative Alternation In Italian”, *Atti del XLIII Congresso Internazionale di Studi della Società di Linugistica Italiana*, pp.809-821.

Salvi, Giampaolo-Vanelli, Laura. 2004. *Nuova Grammatica italiana*. Il Mulino. Bologna.

GDIU, *Grande dizionario italiano dell’uso*, Tullio De Mauro, UTET, Torino, 1999.

和文

山本真司. 1995.「イタリア語の中動態について（その 1）」,『東京外国語大学論集』50, pp.51-59.

山本真司. 2010.「イタリア語の中動態について（その 2）」,『東京外国語大学論集』80, pp.273-291.

山本真司.2012.「イタリア語における非人称の si と受動態の si の構文」，『語学研究所論集』17，pp.23-37.